

学と同時に、東京の空襲を避けるために、一年生は会津高田へ、一方母は六年生と共に新鶴村の花紋屋旅館へそれぞれ学童疎開する事になりました。

当時七才だった私は、親元を離れての不安と疎開先での慣れない生活のために体調を崩し疎開先で寝込んでしまいました。そんな私のことを知った花紋屋旅館のご主人が私の父親代わりという粹な計らいで、会津高田から新鶴村へ再疎開の手続きをして私を引き受けて下さいました。

お陰で元氣を取り戻した私は、母親兼先生、そして六年生達と一緒に花紋屋旅館で生活するようになったのを、はつきりと覚えています。

いま新鶴村でのお世話になった半年余りを振り返ると、一年坊主の私の先生役は六年生だった事、近くの川で素裸で泳いだ水が冷たくて震えてしまった事、イナゴ捕りに夢中になり、稲穂で手足がかぶれて赤く腫れあがり痒くなった事、中田観音の境内で虫捕りをした事など断片的ですが、次から次へと記憶が鮮明に蘇甦ってきます。

でもその思い出が一杯詰まった新鶴村も町村合併で、平成十七年九月末でなくなるそうですが、六十年前私の脳裏に焼き付いた新鶴村での貴重な体験や懐かしい思い出は生涯忘れる事はないと思います。

『ふるさと新鶴村』より転載】

八十八年 思い出に生きる

根本 夕力

老いの体力は、人によって違いますが、私の場合は八十才を過ぎたら早足で減少し、八十五才を過ぎたらそれに記憶力まで駆足でなる

と、八十八才を過ぎれば一体どうなるのだろう。惚けも大分進んでいるし、これ以上進まぬ中に知りたい事を調べ、又思い出した事などを色々書く事とする。

死よりなお苦しき日も数ありき
まぼろしなるやと思える今は

昭和十九年秋の日曜日、今日は午後一時頃から、東京よりこの町に疎開していた西町国民学校生徒全部が各宿舍から紅葉館に集まった所に、キリスト教教会の日曜学校生徒達二十人近くが、慰問に来る日なので、昼食も少し早めにすまし、下げた食器を洗ったり、片付けたりして終ったら、手伝いの人達皆も生徒達の邪魔をしない様にして聞くという事にした。日曜学校の生徒十五、六人と遠藤牧師さんが来られた。小林幸正さん（当時会津中学校二年生で後の商工会事務局長）が年長で国民学校一年生までだった。ハーモニカ伴奏で歌が始まった。手伝いの人達は、二階の舞台裏の裏や、階段の手摺りにつかまって、皆の邪魔をしない様に聞いた。ハーモニカの独奏や合奏とか、唱歌とか劇とか、疎開学童の拍手や笑声が嬉しそうに、夕食の下準備をしてお勝手にいた私にまで聞こえる。「ああよかったな」と私も嬉しかった。

と、突然「やめろ」との怒声がひびいた。

私は何が起きたのかと二階に駆け上がった。呆氣にとられてる先生や皆の前に、仁王立ちになっているのは、特高警察の根岸刑事だった。物凄い顔で遠藤牧師さんを睨みつけている。子供達の歌った歌詞に何かあったのか、すぐ止めて帰れとの言葉に場は白け、日曜学校の生徒